

# ACUUS 参加、イスタンブール・ベオグラード視察報告

Report on 19<sup>th</sup> ACUUS, and Visiting Istanbul and Belgrade

廣瀬 健<sup>1</sup> 福本大輔<sup>2</sup>

Takeshi HIROSE and Daisuke FUKUMOTO

## 1 はじめに

本稿は、2025年11月4日～7日にベオグラード（セルビア共和国）において開催された第19回ACUUS国際会議（19<sup>th</sup> World Conference of the Associated Research for the Urban Underground Space）の参加概要と、当該会議に付随して実施されたベオグラードとイスタンブール（トルコ共和国）の視察結果を取りまとめたものである。

なお本会議に関して、日本では都市地下空間活用研究会が唯一の機関会員であり、当該研究会が結成した視察団として会議及び視察に参加した。



写真－1 視察団の集合写真

表－1 学会・視察日程

| 期間     | 内容            |
|--------|---------------|
| 11/2～4 | イスタンブール視察     |
| 11/4～8 | 学会参加、ベオグラード視察 |

## 2 第19回ACUUS国際会議

ACUUSは、世界各国の都市地下空間に関する調査研究機関や専門家を会員とする国際的NGOであり、これまで、国際会議は概ね2年に一度開催されてきた。第19回となる今回は、参加者約500名であった。今回の

国際会議のメインテーマは「Underground mobility and elevated thinking. New opportunities and challenges in the use of underground urban space.」（地下移動と高度な思索。地下都市空間の利用における新たな機会と課題）であった。

会議初日のパネルディスカッション「地下都市計画を制度的実践に統合する：セルビアにおける戦略的方向性、制度的前提」では、都市地下空間活用研究会の岸井会長が、各国代表の専門家と意見を交わした。

筆者は、論文「Research on the ideas and challenges of creating a walkable pedestrian network by utilizing underground space」を発表し、日本の地下活用の事例紹介を通して意見交換を行った。



写真－2 パネルディスカッションの様子（左）  
発表時の筆者（右）

## 3 ベオグラード視察結果

ベオグラードはセルビア共和国の中心部よりやや北側に位置するセルビア共和国の首都である。旧来のベオグラード市街地は市の中心を流れるサヴァ川の東側にあり、西側は急速な発展が続いているノヴィ・ベオグラード地区である。国際会議の会場はノヴィ・ベオグラード地区に立地していた。

旧来の市街地は、ベオグラード要塞周辺に築かれた欧州らしい石造りの街並みを要する。市街地は起伏のある土地に建物が所狭しと並び、通行空間は立体的かつ複雑

<sup>1</sup> 都市地域・環境部門（東北事務所） 研究員 <sup>2</sup> 東北事務所次長、都市地域・環境部門 担当部門長兼グループマネジャー

に通っている。一方で、見事に整備された歩行者空間も存在し、路上での音楽演奏が行われるなど適度に賑わいのある空間となっていた。サヴァ川に面した空間では、古い建物などを取り壊し、遊歩道などを新設中であった。また、ベオグラード・タワーというシンボリックな建築物が立地している。

新市街地は、1ブロックが大きく、平坦な地形となっている。こちらは国際会議の会場の他、高層ビルやショッピングセンターなども立ち並ぶ。

ベオグラード市内の公共交通は、路線バスとトラム、トロリーバスが担っており、市内の交通機関は一部を除いて無料で利用可能となっている。狭い旧市街を運行する連節バスの様子は、衝撃的である。地下鉄は建設計画があるが、資金不足で難航している。



写真-3 旧市街の歩行者空間と街並み（左）、  
旧市街のラウンドアバウトに進入する連節バス（右）

## 4 イスタンブール視察結果

イスタンブールは、トルコ共和国の北西に位置する都市で、ボスポラス海峡を挟み、市の西側がヨーロッパ側の大陸、東側がアジア側の大陸となっている。ヨーロッパ側はさらに金角湾を境に旧市街（歴史の中心）と新市街（ビジネスの中心）に分けられる。

イスタンブールでは現地ガイド付きでイスタンブール流のTOD開発を視察した。視察対象は、メトロのレヴェント駅周辺とITU-アヤザガ駅周辺であった。レヴェント駅周辺は、交通、商業、住宅の機能を効果的に統合していることがTOD的であると説明された。ITU-アヤザガ駅周辺のTOD的要素は生活・仕事・教育環境のミクスドユースにあると説明された。一方で、いずれの駅周辺也多車線の道路が市街地を分断し、自動車交通量も多い。日く、アクセシビリティ、高密、ミクスドユースがイスタンブールのTOD原則であるとのことで、わが国で一般的に考えられるTODの「車に頼らず、公共交通機関の利用を前提に組み立てられた都市開発」とは異なる印象を受けた。TOD

に関しては、視察団とイスタンブール市との間で意見交換を実施する機会も設けられ、イスタンブールにおける今後のTOD開発計画について意見交換が実施された。

イスタンブールで特に衝撃的だった空間活用は、ガラタ橋である。ガラタ橋は、上部と下部の2層で利用されており、上部に車道、軌道、歩道が整備されている。下部は飲食店が並ぶ。また橋の下は、多数の船舶が往来している。上部では、欄干を乗り越えて釣り竿を垂らす人が多数おり（一部調理器具を持ち込む者もあり）、上部・下部ともに滞留空間となっていた。

地下空間を活用したウォーターフロント再開発の先進事例として、Galataport Istanbulの視察を行った。本開発の目玉の1つには、「世界初の地下クルーズターミナル」があり、これとオフィス・商業・宿泊・文化施設・文化遺産といった多種多様な機能が融合した、革新的な大規模複合型ウォーターフロント開発となっている。

イスタンブールは、公共交通網が密に整備されており、鉄道、地下鉄、トラム、BRT、フェリー、路線バス、ミニバスと多様な交通手段が導入されている。市内の交通機関は、ほとんどが均一運賃制となっており、交通系ICカードのほかクレジットカードでの決済も可能となっている。路線バスを含め、Google Mapsで経路及び時刻表を検索可能で、運行頻度も高く、夜遅くまで運行しているため、非常に便利に感じられた。なお、交通のモラルは良いとは言えない。



写真-4 ガラタ橋の立体的活用

## 5 おわりに

学会参加、セルピア、イスタンブールの視察は、空間活用を考えるうえで大変刺激的であった。次回のACUUS国際会議は2027年に中国南京で開催される。